

## 存在と証示可能性

### 『フッセリアーナ』第36巻『超越論的観念論』を読む\*

松井隆明

(東京大学)\*\*

2003年に『フッセリアーナ』第36巻として公刊された『超越論的観念論』(以下「本巻」)<sup>1</sup>、およびそのタイトルとなっているフッサールの哲学的立場、超越論的観念論は、近年フッサール研究者のあいだで盛んに議論されている<sup>2</sup>。本巻の魅力はたくさんあるが、本巻をとりわけ興味深いものにしてているのは、本巻においてフッサールは経験の単なる記述ではなくあるテーゼの擁護に取り組んでいるという事実である。以下では、今後のさらなる研究のためにいくらか批判的な観点から、本巻におけるフッサールの議論を分節化し、問題の所在を明確化することを目指したい。

本稿の構成は以下のとおりである。第一節では、本巻にはどのようなテキストが収録されているのかを見る。第二節では、フッサールが自分の超越論的観念論はどのような立場ではないと述べているのかを確認する。第三節では、本巻の中心を占める「存在と証示可能性の相関関係」に関するテーゼを詳しく見る。そして第四節

---

\* 本稿は、2015年3月13日に慶應義塾大学三田キャンパスにおいて開催されたフッサール研究会特別企画「フッサールの新資料を読む(3)」での報告に基づいている。

\*\* E-mail: transcendental.idealism.matsui@gmail.com

1. Husserl, Edmund. 2003. *Transzendentaler Idealismus: Texte aus dem Nachlass (1908-1921)*, *Husserliana* Vol. 36, ed. R. Rollinger, Springer, 235 pages + xxxvii.

2. 本巻のレビューとしてはすでに Iyer 2006; Naberhaus 2007; Melle 2010 がある。本稿とあわせて参照されたい。フッサールの超越論的観念論全般に関しては、Smith 2003, 158-211 がまずもって参照されるべきである。フッサールの超越論的観念論に関する研究のうち、本巻所収のテキストについての主題的な考察を含むものとしては、Iyer 2010; Meixner 2010; Zahavi 2008; 植村 2009; 佐藤 2015b; 八重樫 2013, 36-54 を参照。それ以外のテキストを中心的に扱ったもので、2000年以降の研究としては、Bernet 2004; Luft 2007; Smith 2008; 植村 2014; 佐藤 2015a, 155-201; 松井 2015 を参照。植村 2011 は、国内におけるフッサールの超越論的観念論研究の盛り上がりを示している。

では、このテーゼを背景としたさらなる諸問題を概観する。

## 1. 収録テキストの概要

本巻は、そのタイトルが示すように、フッサールの超越論的観念論に関するテキストを集成したものである。だが、超越論的観念論に関するテキストとは何か。超越論的観念論は、自我論や時間論などと並ぶひとつの哲学的主題ではないように思われる。また、「超越論的観念論」というタイトルの講義をフッサールが行ったわけでもない。

編者 R. ローリンジャーによれば、本巻はフッサールのあるテーゼに関連するテキストという観点から編集されている。そのテーゼとは、編者の定式化にしたがえば、

レアルな対象の存在 (Existenz) は、そしてそれゆえレアルな世界の存在は、顕在的 (aktuell) に経験する意識との関係なしには考えることができない

というものである (ix) <sup>3</sup>。レアルな対象、すなわち、非時間的な理念的対象とは異なり時間のうちに位置を占める対象に関する超越論的観念論のこのテーゼを、本稿では「テーゼ (TI-R)」と呼ぶことにしよう (このテーゼに関する詳細な議論は、以下の第三節において行う) <sup>4</sup>。

編者によれば、フッサールが「超越論的現象学的観念論」という表現 (ないしそれに類する表現 <sup>5</sup>) を自分の立場のために使用し始めるのは、1918年の草稿 (本巻の8番の草稿) からである。だが、こうした表現の導入に先立って、フッサールは1908年からすでに (TI-R) (ないしそれに類するテーゼ) の論証を試みていた。そして、(TI-R) の注釈および証明の試みは、1921年に至るまで研究草稿および講義において繰り返し行われることになる。本巻は、(TI-R) をめぐるこの10年以上にわたる格闘を再現することを意図したものである <sup>6</sup>。

3. 本巻編者序論を引用・参照する際は、頁数をローマ数字にて指示する。

4. 編者はレアルな対象に関するこのテーゼを、理念的な対象をも含めた任意の対象に関する一般的なテーゼから区別して、「特殊テーゼ」と呼んでいる。本報告がこの呼称を採用しないのは、テーゼ (TI-R) の他にも、対象領域の数と同じだけの特殊テーゼが存在するはずだからである。「[...] 領域的な概念と同じだけの数の存在論がアプリアリに存在しなければならない」(V, 25[Ideen III §7])。

5. 「超越論的観念論」、「現象学的観念論」、「現象学的超越論的観念論」等がそれである。

6. 具体的には、本巻には次のようなテキストが収録されている。1908年の草稿 (Nr. 1-4) とその付論 (Beilagen I-III)、1913年の講義「自然と精神」からの断片 (Nr. 5)、1915年の講

だがここで念のため次の点には注意を喚起しておいた方がよいように思われる。(TI-R)の注釈および証明の試みが行われたのはたしかに1908年から1921年にかけてのことだったかもしれない。だが、1921年以降もフッサールが超越論的観念論という立場を採り続けていたことは明白である。しばしば引用されるように、フッサールは『デカルト的省察』(1929年執筆、1931年に仏訳にて公刊)において、「このように体系的に具体化されるならば、現象学は自ずと「超越論的観念論」である。[...]この観念論の立証は現象学そのものである」(I, 118-9[§41])と明言しているからである<sup>7</sup>。また他方で、「1908年以前からフッサールはすでに超越論的観念論という立場を採っていたか」という問題もそれほど単純に答えられるものではない。というのも、これは純粹に文献学的な問題ではなく、超越論的観念論という立場をどう解釈するか依存する問題だからである。ここではこれ以上立ち入らないが、この点に関して研究者のあいだでさまざまな見解が提出されていることは注記しておいてよいだろう<sup>8</sup>。

以上のことは、本巻はあくまでも編者ローリンジャーによってテーゼ(TI-R)をめぐるフッサールの苦闘のドキュメントとして編集されたものである、ということに注意を喚起する。一方で、(TI-R)がフッサールの超越論的観念論の主要なテーゼのひとつであることは疑いえない。そして以下で見るように、このテーゼはそれ自体で検討に値するさまざまな興味深い論点を含んでいる。だが他方で、彼の超越論的観念論が(TI-R)を軸に理解されるべきかどうかという点に関しては議論の余地があるように思われる。それゆえ、彼の超越論的観念論の可能性を不当に狭めてし

---

義「現象学の精選問題」の後半部分(Nr. 6)とその付論(Beilage IV)、1914年ないし15年の草稿(Nr. 7)、1918年の草稿(Nr. 8)、1921年の草稿(Nr. 9-12)とその付論(Beilagen V-VI)。フッサール・アルヒーフの整理番号で言えば、本巻に収録されているのは、B II 1, B IV 6, F I 31, K II 1からの草稿である。これらの草稿は、本巻の公刊以前にも、たとえばMarbach 1974, 55やSmith 2003, ch. 4において引用されている。

7. また、「『イデー』へのあとがき」(1930年)においても、フッサールは次のように述べている。「私は超越論的現象学的観念論に関して撤回すべきものを全く何もっていない」。「具体的な学問としての超越論的現象学は、たとえ観念論に関して一言も言われていないときでさえ、それ自体において全面的な観念論である」(V, 150-1; 152[§5])。

晩年の未完の著作『危機』(第一部と第二部のみ1936年に公刊)に関しては、事情はやや複雑である。たしかに『危機』においては、フッサールは「超越論的観念論」やそれに類する表現を自身の立場を表すものとして用いてはいない。だがこのことは、晩年のフッサールは超越論的観念論という立場を放棄していたということを意味するわけではない。「観念論」という表現の放棄が観念論という立場の放棄を意味するわけではないことは、同時期に書かれた次の書簡が示している。「通常のどんな『实在論者』も、現象学的『観念論者』である私以上に实在論的で具体的であったことはありません(もっとも、この語を私はもう使わないのですが)」(BW VII, 16[1934年6月8日パウディン宛書簡])。実際、『危機』においてもフッサールが超越論的観念論という立場を採っているということは、多くの研究者が認めていることである(cf. Kern 1964, 276n; Moran 2012, 229; Smith 2003, 188-200)。

8. cf. Moran 2005, 174; 佐藤 2015a, 162-8; 富山 2013.

まわらないためにも、本巻がフッサール自身の手によってまとめられたものではないという点には注意をしておいた方がよいと思われる。

さて、上記のような方針で編集されているため、本巻ではテーゼ (TI-R) に関連する同一のないしは類似したテーマが繰り返し論じられることになる。そこで以下では、個々のテキストをひとつひとつ取り上げるのではなく、(TI-R) を中心に統一的な観点からひとつの見取り図を描くことを試みたい<sup>9</sup>。

## 2. 超越論的観念論のネガティブな規定

ありうる誤解をあらかじめ避けるために、テーゼ (TI-R) を具体的に検討する前に、フッサールが自分の立場はどのようなものではないと言っているのかを簡単に確認しておきたい。

まず、フッサールによれば、彼の超越論的観念論は懐疑論的な立場ではない。

われわれは物の存在を疑うわけではない。しかし、それを前提するわけでもないし、また前提することもできない。「正当に根拠づける」ということが何なのか [...] を研究しないかぎり、われわれはそれがどのような意味をもつのかを全く理解できない。われわれは懐疑論者ではない。しかし、われわれは物の定立を問いのうちに置く。それが何であり、またそれに属すべき諸権利の区別がどのようなものなのかを、われわれはまだ知らないのである。(8[1])<sup>10</sup>

また、フッサールによれば、彼の超越論的観念論は、物が意識からできていると主張しているのでもない。

対象的な学問の意味での存在は「意識」へと「解消 (auflösen)」される。[とはいえ] 物そのものが意識へと分解 (auflösen) されるわけではない。それは原子や分子へと分解される。だが、「ある物が現実存在する」とか「ある現実が存在する」等の認識は、認識連関、意識形態を遡示しており、物の存在やあらゆる物的な事態はこの認識連関においてその意味を獲得するのである。(28[2])

さらに、フッサールによれば、彼の超越論的観念論は虚構主義 (Fiktionalismus) で

9. ただし発展史的な関心にも配慮し、本巻からの引用を行う際は、頁数とともに草稿番号を示すことにする。各々の草稿の執筆年代に関しては、前註6を参照。

10. 本巻本文への引用・参照指示は、(頁数 [草稿番号]) の形式で行う。

もない。

[...]あたかもその他のあらゆる存在は単に見かけ上の存在、非現実的な仮象、虚構にすぎないかのように、「ただ絶対的意識だけが存在する」と言うならば、それは有害だろう。そのように言うならばそれはもちろん根本的な誤りであろう。自明のことながら、自然の諸対象は真なる対象である。その存在は真なる存在であり、自然は真正かつ全き意味での現実である。この存在がそのカテゴリーに応じて要求しているのとは別の尺度をこの存在にあてがうのは根本的に誤りであるし、それが意識において「構成されるもの」、意識に根をもつものであるという理由でその信用を失わせるというようなことは根本的な誤りである。(70-1[4])

もちろん、〈あるものの存在を「意識において『構成されるもの』とみなしても「その信用を失わせる」ことにはならないとフッサールが言っている〉ということから、〈実際にそのようなことにはならない〉ということは帰結しない。後者の主張が説得的かどうかは、フッサールの議論を吟味することによってはじめて決められることである。以下では、そのための第一歩として、フッサールの主張をもう少し分節化することを試みたい。

### 3. テーゼ (TI-R) の分節化

#### 3.1 テーゼ (TI-R) はそもそも何についての主張なのか

本巻の編者ローリンジャーによって定式化された (TI-R) とは次のようなものであった。

リアルな対象の存在は、そしてそれゆえリアルな世界の存在は、顕在的に経験する意識との関係なしには考えることができない。(IX)

だが、このテーゼは、そのままでは、それが実質的にどのようなことを主張しているのかという点だけでなく、そもそも何についての主張なのかという点さえそれほど明らかでない。それは、「存在」についてのテーゼなのか、それとも単にわれわれの「思考」についてのテーゼにすぎないのか、あるいは両方なのか。

編者はこのテーゼと「同値」のものとして、フッサールの草稿から次の三つを挙げている (IX<sub>nl</sub>)。

いかなる意識も存在しなければ、レアルな事実・物・自我の存在はその意味を失う。そしてそれとともに、実在性の諸形式もその意味を失う。(19[1])

「物がある」という言表は、[...]ひとが顕在的意識[...]を否定しようとするれば、いかなる意味ももたなくなる。(64[4]; 省略は編者によるもの)

超越論的観念論は言う。自然は、それについての〈可能な経験〉の主体がともに現実に存在すること (Mitexistenz) なしには、考えることができない。経験主体の可能性だけでは十分でない、と。(156[9])

一つ目の引用においては「事実・物・自我の存在」と「その意味」が問題にされているのに対して、二つ目と三つ目の引用においては「言表」や「思考」に対する何らかの制約が問題にされているように見える<sup>11</sup>。だがそうだとすると、諸対象の存在とその意味に関する問題(前者)と、われわれの言表や思考に関する問題(後者)は、どのように関係すると考えられているのか。

テーゼの定式化の試みはフッサール自身によっても行われているので、ここでそれを参照しておくのがよいだろう。そのような試みは1914年ないし15年の草稿(7番の草稿)に見出される。フッサールは、このテキストの中程において、「私は、以上の思考の過程が遺漏なく根拠のあるものだと思っている」とした上で、「そうだとすると、われわれはある重要な一般認識論的テーゼを示したことになるだろう」と述べている。そのテーゼとは次のようなものである<sup>12</sup>。

各々の事実的存在者 (Sein) の存在 (Existenz)、各々の「個体的」存在者 (もちろんこれには事態や関係等も含まれる) の存在は、認識する主体ないし認識能力をもった主体が必然的にともに存在すること (Mitexistenz) を要求する。  
(139-40[7])

この定式化では、フッサールが何について何を主張しているのかがかなり明瞭に表現されている。すなわち、フッサールは、個体的な対象の存在について、それは認識主体の存在と必然的な関係をもつ、と主張しているのである。

11. 前節で引用した三つのテキストにおいても、一つ目と二つ目の引用ではわれわれの「正當に根拠づけること」や「定立」、「認識」が、そして三つ目の引用では「物の存在」や「物的な事態」とその意味が、問題になっていた。

12. 同草稿におけるより簡潔な表現として次も参照。「レアルな存在 (Sein) は事実に存在する認識主観性を要求する」(132[7])。

この主張の背後にはおそらく、真理は認識的に「根拠づけ」られなければならないというフッサールの想定があるように思われる。フッサールはある箇所ですべてのよう

真理の根拠づけはコギタチオにおいて、意識において、遂行される。(54[3])

また、別の箇所では次のように述べている。

もしひとが「ある世界がそれを経験する自我が存在しなくとも存在しうる」と言うならば、それは無意味である。というのも、「ある世界が存在しうる」という真理は原理的な根拠づけ可能性なしには何ものでもないが、この根拠づけ可能性はこの世界に定立的にかかわる顕在的な自我を前提するからである。(119[6])

ここで問題になっている真理の根拠づけとは、真理の「認識的」な根拠づけである。つまりそれは、命題とそれを真にする存在者のあいだに成り立つとされるいわゆる「真にする (Truth-making/Wahr-machen)」という関係ではなく、「あるものの定立のための根拠づけ」(16[1]; 強調引用者) である。したがってここではまた、「正当な定立の相関者としての存在」という存在概念も前提されている。これらは (TI-R) の基本的な前提をなしているように思われるが、これらの前提の妥当性を吟味することは本稿の課題ではない。

### 3.2 証示の論理的な可能性と実質的な可能性

テーゼ (TI-R) は、ある個体的な対象と顕在的意識のあいだの必然的な関係を主張するものであった。本項では、顕在的意識という概念が (TI-R) においてどのような役割を果たしているのかを見ていきたい。あらかじめ述べておけば、(TI-R) の背景には本稿が「証示可能性の原理」と呼ぶものがあり、顕在的意識という概念はそこに登場する「証示可能性」という概念を分節化するために用いられている。

まずは証示可能性の原理から見ることにしよう。フッサールは次の原理を採用していると考えられる。

証示可能性の原理：ある対象  $a$  が存在する (現実的である) のは、 $a$  が証示可能であるときであり、かつそのときにかぎる<sup>13</sup>。

13. 『A は存在する』という命題と、『A の存在の可能な証示の道筋 (Weg) が構成されうる (konstruieren)』という命題、『そうした証示の理念的で洞察可能な可能性が成立している』

この原理は、何かが存在するならばそれを証示することが可能でなければならない、という主張を含んでいる。だが、何かを証示することが可能であるとかないとか言われるとき、そこで問題になっている「可能性」とはどのような可能性だろうか、とフッサールは問う。

ある物が存在するならばそれに対応する経験および根拠づけの可能性が成立していなければならない、ということが認められたとしよう。だが、「可能性が成立していなければならない」とは何を意味するのか。(60 [3])

神話の世界の住人にとってケンタウロスの存在を証示することは可能かもしれない。だが、ケンタウロスはわれわれが生きるこの世界には存在しないはずである。それゆえフッサールは、ここでは少なくとも二つの可能性概念が区別されなければならない、と考える。フッサールはその一方を「論理的可能性」と呼び、もう一方を「実質的 (real) な可能性」と呼ぶ。そして、ここで両可能性概念を区別するために彼が用いるのが、顕在的意識という概念である。まずは前者の論理的可能性から見ていこう。

フッサールによれば、証示の論理的な可能性とは想像可能性によって担保されるような可能性である。つまり、何かが想像可能であるならば、その証示は論理的に可能である。それゆえ、証示が論理的に可能なものの集合のうちには、無限に多くのものが、つまり、想像可能でありかつ現実的に存在するものも、単に想像可能なだけのものも、等しく含まれることになる (フッサール自身が用いる例で言えば、上で挙げたケンタウロス (75[5], 149[8], 151[9], *et passim*) のほかに、太陽ほどの大きさのダイヤモンド (37[2], 60[3]) などもそこに含まれることになる)。他方で、球体であるという性質と立方体であるという性質をともにもつような物は想像可能でない。それゆえそのようなものは、その証示が論理的に不可能である。そして、その証示が論理的に不可能なものは、その証示が原理的に不可能である。

だが、何かが想像可能であるとかないとか言われるとき、それによって何が意味されているのか。フッサールは想像作用を知覚作用 (ないし経験) の変様と考える。それゆえ彼は次が成り立つと考えている (cf. 74-6[5], 112-9[6], 151-4[9], 183-5[11]) :

対象のあるタイプ A が想像可能であるのは、A の個別事例 a を含むある可能世界が存在し、そこにおいてある主体 (可能な主体) が a を知覚 (経験) してい

という命題は同値である。それゆえ一般的に言えば、『真理』という観念と『洞察的な証示の理念的可能性』という観念は同値の観念である」(73[5]; cf. 132[7])。



るときであり、かつそのときに限られる<sup>14 15</sup>。

さて上でも述べたように、a の証示が論理的に可能であっても、そのことはわれわれが生きるこの世界 („die“ Welt) に a が存在することを保証しない。それゆえ、証示可能性という概念によってこの世界に現実に存在するものだけを取り出してくるためには、その証示可能性は、単なる論理的な可能性でなく、何らかの**実質的** (real) な可能性でなければならない。フッサールはこの「証示の実質的な可能性」という概念を、顕在的意識と「一定の関係に立つ」ということによって分析しようとする。つまり彼は次が成り立つと考える。

ある対象 a が実質的に証示可能であるのは、a が顕在的意識によって実際に知覚されているか、あるいは a が顕在的意識と一定の関係に立っているか、のいずれかであるときであり、かつそのときにかぎる。

そしてフッサールはここで問題になっている「一定の関係」をさらにさまざまな概念を用いて現金化しようと試みる。

- 推論可能性：顕在的意識によって経験されているものから a の存在を推論できる (cf. 11-2[1], 54[3])
- 経験の総合的統一：顕在的意識の経験 E と a についての可能な経験 E' が総合的統一へともたらされうる (cf. 16[1], 77[5], 112-9[6], 181[10], 190[11])<sup>16</sup>
- 動機づけ：顕在的意識の経験が a の存在の想定を理性的に動機づけている (cf. 28, 31, 37[2], 60-1[3], 68-9[4], 112-9[6])
- 実践的能力：a を経験し認識する実践的な可能性ないし実践的能力 (praktisches

14. とはいえ、これではその証示が論理的に可能なものの範囲が狭くなりすぎてしまうので、ここでの「知覚」は広い意味で理解した方がよいと思われる。つまり、ここでは物的な対象に固有の所与性としての知覚 (狭義の知覚) が問題になっているのではなく、与える意識 (gebendes Bewußtsein) 一般が問題になっている、と。そうだとすると、「a が想像可能である」とは「ある可能世界においてある (可能な) 主体に a が与えられる」ということになる。

15. 厳密な意味で「知覚」や「経験」と呼ばれるのは顕在的な意識によって遂行されるものだけなので、可能な主体によって遂行される知覚、経験は、準知覚 (Quasi-Wahrnehmung)、準経験 (Quasi-Erfahrung) と呼ばれることもある (cf. 153[9], 186[11])。

16. そして、総合的統一の可能性はさらに、経験の調和的進行の可能性によって分析される。すなわち、E と E' が総合的統一へともたらされうるのは、E から E' へと調和的に進行しうるときであり、かつそのときにかぎる。

この背景には、連続的综合が非連続的综合に概念的に先行する、というフッサールの一般的な考えがあると考えられる (cf. VI, 172[Krisis §49]; Smith 2008, 326-8)。

Können) を顕在的意識がもっている (cf. 139[7])

- **Umgebung** : 顕在的意識によって経験されているものを取り巻く空間的 (・時間的<sup>17)</sup> 領域を無限に拡張したとき、**a** がそのうちに見出される (cf. 112-6[6])

ここで挙げた諸概念の関係をフッサーがどのように考えていたのかは残念ながらそれほど明らかでない。**a** が顕在的意識と一定の関係に立つために、これらすべての条件が満たされなければならないのか。あるいは必ずしもすべてが満たされなくてもよいのか。また、これらの概念は基礎的なものと派生的なものに分かれるのか。つまり、ある概念は別の概念によって説明されるのか。これらは難しい問題であるため、本稿ではこれらをオープンなままにしておかざるをえない。

とはいえ、問題の「一定の関係」の内実がどのようなものであれ、証示が実質的に可能なものは次のような特徴をもつと考えられている。証示が実質的に可能なものの集合のうちには、現実中存在するもの**すべて**が含まれるというだけでなく、現実中存在するもの**だけ**が含まれる。それゆえ、証示が論理的に可能なもののうち、証示が実質的に可能なものと両立不可能なものは、証示が**単に論理的に可能であるにすぎないもの**としてそこから排除されることになる (cf. 119[6])<sup>18</sup>。ケンタウロスはまさにこの事例である。

以上をまとめると次のようになる。フッサーによれば、何かが証示可能であると言われるとき、二つの証示可能性概念が区別されなければならない。ひとつは想像可能性によって保証される証示可能性 (証示の論理的可能性) であり、もうひとつは顕在的な知覚意識と一定の関係に立つことによって保証される証示可能性 (証示の実質的可能性) である。証示が論理的に不可能なものは、証示が原理的に不可能である。証示が論理的に可能なもののうち、証示が実質的に可能なものと両立不可能なものは、証示が単に可能であるにすぎないものである。そしてフッサーは、このように分節化された**証示可能性概念**を用いて、**対象の様相的なカテゴリー**を以下のように分析する。すなわち、証示が論理的に可能なものは**存在することが理念的に可能**であり、証示が実質的に可能なものは**現実中存在する**。証示が原理的に不可能なものは**存在することが不可能**である。証示が単に論理的に可能であるにすぎないものは、存在することが**単に理念的に可能であるにすぎない**。

ところで、フッサー自身がある箇所では仄めかしているように<sup>19</sup>、ここでの彼の基本的な発想は、カントの『純粋理性批判』、とくにその原則論における第四原則「経験的思考一般の要請」(KrV, A218-26/B265-74) に由来するものであると思われる。

17. 時間的な拡張の場合には、遠い過去などの問題が生じることになる (4.4 を参照)。

18. cf. Smith 2008.

19. 「ここでは可能性が主要概念である。それは空虚な可能性ではなく、すでにカントが認識していたように、顕在的な諸知覚との関係をもつ可能性である」(12[1])。

というのも、そこでのカントの基本的なアイデアとは、「様相のカテゴリーは、述語として概念に付加される際に [...], ただ認識能力 (Erkenntnisvermögen) との関係を表現するにすぎないという特異性をもっている」(KrV, A219/B266) というものだからである。フッサールの超越論的観念論をカントのそれと対比させることは、今後の重要な課題であると言えるだろう<sup>20</sup>。

### 3.3 個体的な対象と理念的な対象

個体的な対象の存在という概念を証示可能性という概念によって分析するためには、その証示可能性は顕在的意識と結びついていなければならなかった。だが、理念的(形相的)な対象の場合にはそのような必要はない、とフッサールは考える(cf. 17-9[1], 120-1[6], 146-50[8], 158-9[9])。というのも、理念的な対象の場合には、ある可能な主体にとって証示可能なものは、原理的にはすべての可能な主体にとって証示可能でなければならないからである<sup>21</sup>。そしてそれは、理念的な対象の場合には可能性と現実性が一致するからだと言えらるフッサールは言う。

ある形相的な対象の可能性はその現実性と同値である。(146, 149[8])

こうしてフッサールは、本質真理と事実真理という伝統的な概念対もまた証示可能性という概念を用いることによって特徴づけることができると言う。すなわち、すべての可能な主体にとって証示可能でなければならない真理は本質真理であり、顕在的意識と一定の関係に立つことによってのみ証示可能な真理は事実真理である(cf. 17-9[1], 158-9[9])。

## 4. さらなる諸問題

前節で取り上げた枠組みを背景にして、フッサールはさらにいくつかの問題に取り組んでいる。ただしそれらはいずれも断片的にしか扱われていないため、以下ではその要点だけを記すことにする<sup>22</sup>。

20. フッサールのカントとの関係に関しては、Kern 1964 が基本的な情報を与えてくれる。

21. もちろん、すべての可能な主体が「実際に」証示を遂行できなければならないとフッサールが言っているわけではない (cf. 146[8])。

22. 本巻には以下で取り上げる論点の他に、知覚の直接的所与性というテーゼの擁護、および知覚の写像説・推論説に対する批判も多く含まれている。これらはフッサールの超越論的観念論の基本的なモチーフのひとつであると考えられるが、同様の議論は本巻以外のテキストにも多く見出されるためここでは割愛する。知覚の写像説・推論説に対する批判に関しては、『論理学研究』「第五研究」§§ 11&20 への付論、『イデーニ I』§§ 40, 43, 52などを参照。

#### 4.1 物自体

フッサールは、カント以後の物自体をめぐる問題の背後に、「それ自体 An-sich」という概念の「意味」に関する問題を見ている (cf. 27[2]; 191[12])。物自体の問題に関してフッサールは断片的な議論しか遺していないが、その十全な議論はネガティブパートとポジティブパートという二つの部分からなるものとして再構成できるように思われる。前者のネガティブパートでは「誤った形而上学の意味での物自体」(67[4])を退けることが目指され、後者のポジティブパートでは彼が正しいと考える意味での「それ自体」の概念を構築することが目指される。本項ではネガティブパートに関わると考えられる議論を概観し、ポジティブパートに関すると考えられる議論は次項で取り上げる。

本稿がネガティブパートと呼ぶものにおいて、フッサールは少なくとも二つの異なった物自体概念を退けようとしている。ひとつは、物はわれわれが原理的に経験不可能な性質(規定)をもつことができる、と言われるときの意味での物自体である (cf. 32[2])。このような考えに対してフッサールは、存在の本質には正当に与えられうるということが属している、と言い、それゆえ物の存在自体の根底に原理的に経験不可能な性質、可能な経験を超えた性質があるというのはナンセンスである、と結論している。

フッサールはまた次のような考えを、すなわち、〈われわれに与えられる物とは、われわれに固有の形式を通じて与えられた物にすぎず、物そのものではない。物そのものは、われわれとは根本的に異なっただけ神のような存在者にしか与えられない〉という考えを、対象の統一性という考えに基づいて否定しようとする (cf. 66-7[4])。こうした考えに対して、フッサールは次のように言っている。すなわち、物についての「われわれの」所与性に対置されるような、いかなる別種の所与性も存在しえない。しかしかの仕方で与えられるということは、当の物の本質に属することである。それゆえ、ある物についての私の経験とその物についての別の存在者の経験がどれだけ異なっていたとしても、それらがともにその物についての経験であるかぎり、それらの諸経験は統一へとともたらされうるのでなければならない、と。

#### 4.2 カント的な意味での理念

1913年の講義からの断片(5番の草稿)では、「カント的な意味での理念」という概念が、断片的にはあるが、論じられている (cf. 77-8[5])。この概念は物自体に関するフッサールのポジティブな議論の重要な部分をなすと考えられる<sup>23</sup>。

議論の前提として、少なくとも超越的对象の認識に関しては、フッサールは可謬

---

知覚の「直接的所与性」というアイディアを真面目に受け止めることの意義に関しては、葛谷 2012 を参照。

23. cf. Bernet 1994, 130-1, 136-8; Philipse 1995, 272-8.

主義的な考えをもっている。すなわち、ある時点で真とみなされたどのようなことも、偽であったことが後に判明しうる。フッサールはここから、それゆえある物を完全に証示するためには無限の経験が必要である、と考える。しかしフッサールによれば、そのような無限の経験がある**現実的な意識において**実現する必要はない。それどころか、そのようなことは反意味ですらある。こうしてフッサールは、物の存在は**顕在的な意識**にとってはつねに**理念**である、と主張する。フッサールによれば、それは、数やスペチエスといった**理念的な存在**という意味での理念ではなく、**カント的な意味**での理念である。

顕在的な意識にとって物の存在とはつねに理念であるということが意味するのは、その都度の経験されたものはさらなる諸経験に対して統制的にある型をあらかじめ描いているということだとフッサールは言う。そして、ある型をあらかじめ描いているとはすなわち、経験されたものはのちに経験されるものと調和するような仕方で進行しなければならないということだと言う。

カント的な意味での理念に関する議論は本巻では断片的にしかなされていないので、この問題を十分に議論するためには他の巻における議論も参照する必要があるだろう<sup>24</sup>。

#### 4.3 主体の身体性<sup>25</sup>

1914年ないし15年の草稿(7番の草稿)では、3.1で引用したテーゼ(「一般認識論的テーゼ」)に加えて、もうひとつ別のテーゼが検討されている。それによれば、

[...] レアルな存在(これはレアルな世界を要求する)ないしレアルな世界の存在は、それに相関的な認識の主観性がこの世界内の身体的主観性、人間的主観性である、というようにしか考えることができない。(132[7])

本稿ではこのテーゼを「主体の身体性」テーゼと呼ぶことにしよう。本巻には主体の身体性テーゼのための少なくとも二つの異なった系列の議論が見出される。

ひとつは、「空間的な位置(räumliche Orientierung)の移動」に基づく議論である(cf. 132-3[7])。それはおおむね次のようなものである。世界の中で空間的位置を自由に変えることができるためには、主体はその世界の一部である身体をもたなければならない。時間的位置とは異なり空間的位置に関しては、主体は意志によって自由にその位置を変えることができる。それゆえ、主体は身体をもたなければならない

24. カント的な意味での理念は、『フッセリアーナ』第20巻第1分冊『論理学研究補巻』においてより詳しく論じられている。佐藤2016を参照。

25. この主題は、本巻で扱われている諸主題のうち、もっとも多く研究者を惹きつけてきたものである。Iyer 2010; Moran 2005, 197; Zahavi 2008, 362; 佐藤 2015b, 166-8を参照。

い。

主体の身体性テーゼのためのもう一つの議論は、主体の複数性に基づく議論 (cf. 163-6[9]) である。他者ないし他者の経験がわれわれに与えられるためには、その他者の身体である物体と自分の身体である物体のあいだの類似性が把握されなければならない、とフッサールは考える。それゆえ、他者とかがかわることができるかぎり、われわれは身体をもつことになる。

#### 4.4 遠い過去<sup>26</sup>

証示可能性の原理は、過去に存在した対象の存在に関してある困難を抱えるように見える。それは、ある対象が存在することとそれが実質的に証示可能であることが同値なのだとすると、過去の存在がそれと同値であるところの過去に関する証示可能性をどのように考えればよいのか、という問題である。この問題がとりわけ深刻になるように思われるのは、意識をもった存在者がまだ世界に存在していなかった遠い過去の場合である。もちろんフッサールもこの問題に気づいており、本巻の中で取り組んでいる。

フッサールはある箇所において、意識が登場する以前の過去とは意識が登場してはじめて意味をもつものにすぎない、と述べている (cf. 19-20[1])。だが別の箇所では、モナドの眠りと目覚めという概念に訴えて遠い過去の問題を解決しようとする (cf. 140-3[7])。われわれは通常、自分が眠っているときに世界がなくなっているとは考えない。そこでフッサールは、意識的な存在者が誕生する以前の世界も、生成消滅せずそれゆえ不死であるようなモナドが「眠っている」状態とみなせばよいのではないかと考える。このように考えたならば、遠い過去における世界のあり方は、われわれが眠っているときの世界のあり方と類比的に説明することが可能であるかもしれない、というわけである。とはいえフッサール自身も言うように、ここでの議論は「きわめて錯綜」(143[7]) している<sup>27</sup>。遠い過去の問題を真剣に考えるためには、フッサールの時間論を彼の超越論的観念論を背景に読み直すという作業が必要となるだろう。

26. この主題に関する詳細な議論は、Smith 2003, 200-10; 富山 2015 を参照。

27. スミスは、フッサールのモナドロジーは「バロック的とまでは言わなくとも、いくらか思弁的な性格」をもつと評している (Smith 2003, 210)。

## おわりに

本稿はこれまでテーゼ (TI-R) を中心に本巻を概観してきた。最後に、本巻がフッサール研究においてどのような意義をもちうるかに関して若干の所見を述べておきたい。

まず、『イデーニ I』の読者にはすでに明らかであると思われるが、本巻の主題はまさに『イデーニ I』第四篇第二章「理性の現象学」のそれである<sup>28</sup>。同章の議論はきわめて圧縮されており難しいが、本巻はそれを解きほぐすための素材を提供してくれるだろう<sup>29</sup>。また、一見すると超越論的観念論とは無関係と思われる主題も、あるいは場合によっては超越論的観念論からの離反とさえ思われてきた主題も、本巻を背景とすることでより良く理解できるようになるかもしれない。超越論的観念論は、フッサールの哲学におけるひとつの特殊な主題というよりは、個々の主題がそれを背景にして論じられる、彼の哲学の基本的な枠組みをなすものだと考えられるからである。実際、生活世界論や価値論を超越論的観念論という枠組みのなかで読もうとする試みがすでにいくつかなされている<sup>30</sup>。

さらに、上でも何度か触れたように、本巻はフッサールのカントに対する関係を再考するための素材も提供してくれるだろう。カントの超越論的観念論に関してはすでに研究の蓄積があるため、フッサール研究者はそうした研究成果を利用することもできるかもしれない<sup>31</sup>。また、「カントの超越論的観念論に対する応答」というテーマは、フッサールをドイツ観念論の哲学者たちや<sup>32</sup>、新カント主義者たち、ハ

28. フッサールは『イデーニ I』第四篇第二章の冒頭で次のように述べている。「原理的に言えば、論理的な領域、言表の領域においては、「真に存在する」ないし「現実存在する」と、「理性的に証示可能である」は相関関係にある」(III/1, 314)。

29. スミスは、本巻が公刊される以前に、本巻に収録されることになる草稿を用いながら、関連する議論を行っている (Smith 2003, 158-88)。

30. たとえば、生活世界論は、原理的に知覚不可能な種類の対象の身分をめぐる議論として、超越論的観念論からの離反ではなく、むしろ超越論的観念論に不可欠な部分とみなされうる (cf. Smith 2003, 188-200)。フッサールの価値論が構成分析という超越論的観念論の一般的な枠組みを背景にしているという点に関しては、八重樫 2013, 73-94 を参照。

31. Carr 1999, 108-11; Crowell 2001, 236 はアリソンのカント解釈 (Allison 1983) を参照している。

32. ドイツ観念論に関するフッサールの好意的な発言としては、次のリッカート宛書簡を参照。「[...] いつの間にか自分が観念論の敷地の内に入っているのに気づいたとき、私ははじめてドイツ観念論の偉大さと意義を [...] 把握できるようになりました ([...] フィヒテが私をますます強く引き付けています)。[...] われわれは同盟者として、われわれの共通の敵である、われわれの時代の自然主義と闘っているのです」(BW V, 178[1915年12月20日リッカート宛書簡]; cf. BW V, 137[1918年6月29日ナトルプ宛書簡])。

イデガーと対比させる際の共通の土俵にもなりうるだろう<sup>33</sup>。こうしたテーマを追求することは、単にフッサール研究にとってだけでなく、ドイツ哲学史研究にとっても重要な課題であると思われる。

#### 参考文献

- Allison, H. 1983. *Kant's Transcendental Idealism*, Yale University Press.
- Bernet, R. 1994. *La vie du sujet: Recherches sur l'interprétation de Husserl dans la phénoménologie*, Presses Universitaires de France.
- . 2004. "Husserl's Transcendental Idealism Revisited," *The New Yearbook for Phenomenology and Phenomenological Philosophy* 4, 1-20.
- Carr, D. 1999. *The Paradox of Subjectivity*, Oxford University Press.
- Crowell, S. 2001. *Husserl, Heidegger, and the Space of Meaning: Paths toward Transcendental Phenomenology*, Northwestern University Press.
- Crowell, S. & Malpas, J. eds. 2007. *Transcendental Heidegger*, Stanford University Press.
- De Palma, V. 2005. "Ist Husserls Phänomenologie ein transzendentaler Idealismus?" *Husserl Studies* 21, 183–206.
- Dewalque, A. 2006. "Analyse noétique et noématique," in H. Rickert, *Les deux voies de la théorie de la connaissance: Psychologie transcendentale et logique transcendentale*, ed. & trans. A. Dewalque, Vrin, 7-107.
- Fabbianelli, F. & Luft, S. eds. 2014. *Husserl und die klassische deutsche Philosophie*, Springer.
- Han-Pile, B. 2005. "Early Heidegger's Appropriation of Kant," in eds. H. Dreyfus & M. Wrathall, *A Companion to Heidegger*, Blackwell, 80-101.
- Iyer, A. 2006. "Consciousness, Humans and the World: A Critical Review of Husserl's *Transzendentaler Idealismus: Texte aus dem Nachlass (1908-1921)*," *Recherches Husserliennes* 24, 101-119.
- . 2010. "Transcendental Subjectivity, Embodied Subjectivity and Intersubjectivity in Husserl's Transcendental Idealism," in Vandeveld & Luft 2010, 66-75.
- Kant, I. [1781/87] 1998. *Kritik der reinen Vernunft*, Meiner.[=KrV]

33. フッサールのカントおよび新カント主義との関係に関しては、Kern 1964 が今なお最も参照されるべきである。近年の研究としては、Crowell 2001, 23-36, 56-75; Dewalque 2006; Luft 2007; 2010; Staiti 2014; Welton 2003 を参照。フッサールとドイツ観念論の関係に関しては、Fabbianelli & Luft 2014 を参照。超越論的観念論はハイデガー研究においても近年ホットな話題となっているが (cf. Crowell & Malpas 2007; Han-Pile 2005; 丸山 2015)、その成果がフッサールとの比較研究に反映されるにはまだ至っていない。先駆的な研究として、Crowell 2001 を参照。



- Kern, I. 1964. *Husserl und Kant: Eine Untersuchung über Husserls Verhältnis zu Kant und zum Neukantianismus*, Nijhoff.
- Luft, S. 2007. "From Being to Givenness and Back: Some Remarks on the Meaning of Transcendental Idealism in Kant and Husserl," *International Journal of Philosophical Studies* 15(3), 367-94; repinted in his *Subjectivity and Lifeworld in Transcendental Phenomenology*, Northwestern University Press, 2011, 185-206.
- . 2010. "Reconstruction and Reduction: Natorp and Husserl on Method and the Question of Subjectivity," in eds. R. Makkreel, & S. Luft, *Neo-Kantianism in Contemporary Philosophy*, Indiana University Press, 59-91.
- Marbach, E. 1974. *Das Problem des Ich in der phänomenologie Husserls*, Nijhof.
- Meixner, U. 2010. "Husserls transzendentaler Idealismus als Supervenienzthese: Ein interner Realismus," in eds. M. Frank & N. Weidtmann, *Husserl und die Philosophie des Geistes*, Suhrkamp, 178-208.
- Melle, U. 2010. "Husserls Beweis für den transzendentalen Idealismus," in eds. C. Ierna, H. Jacobs & M. Mattens, *Philosophy, Phenomenology, Science: Essays in Commemoration of Edmund Husserl*, Springer, 93-106.
- Moran, D. 2005. "Transcendental Phenomenology: An Infinite Project," chap. 6 of his *Edmund Husserl: Founder of Phenomenology*, Polity, 174-201.
- . 2012. "Phenomenology as Transcendental Philosophy," chap. 7 of his *Husserl's Crisis of the European Sciences and Transcendental Phenomenology: An Introduction*, Cambridge University Press, 218-56.
- Naberhaus, Th. 2007. "Husserl's Transcendental Idealism," *Husserl Studies* 23(3), 247-260.
- Philipse, H. 1995. "Transcendental Idealism," in eds. B. Smith & D. W. Smith, *The Cambridge Companion to Husserl*, Cambridge University Press, 239-322.
- Sanchez, C. 2010. "Epistemic Justification and Husserl's "Phenomenology of Reason" in *Ideas I*," in Vandavelde & Luft 2010, 7-20.
- Smith, A. D. 2003. *Husserl and the Cartesian Meditations*, Routledge.
- . 2008. "Husserl and Externalism," *Synthese* 160(3), 313-333.
- Staiti, A. 2014. *Husserl's Transcendental Phenomenology: Nature, Spirit, and Life*, Cambridge University Press.
- Vandavelde, P. & Luft, S. eds. 2010. *Epistemology, Archaeology, Ethics: Current Investigations of Husserl's Corpus*, Continuum.
- Welton, D. 2003. "The Systematicity of Husserl's Transcendental Philosophy: From Static to Genetic Method," in ed. D. Welton, *The New Husserl: A Critical Reader*, Indiana University Press, 255-288.

- Zahavi, D. 2008. "Internalism, Externalism, and Transcendental Idealism," *Synthese* 160(3), 355-374.
- 植村玄輝. 2009. 「形而上学における志向性の方法——フッサールの『意味の理論講義』(1908)の意義」, 『現象学年報』25, 89-97.
- . 2011. 「ワークショップ報告「フッサールの超越論的観念論再考」」, 『現象学年報』27, 41-7.
- . 2014. 「現象学の伝統における観念論・実在論問題を描き直す」, 『立正大学哲学会紀要』9, 65-85.
- 葛谷潤. 2012. 「『論理学研究』における知覚論の二つの解釈」, 『論集』31, 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部哲学研究室編, 183-96.
- 佐藤駿. 2015a. 『フッサールにおける超越論的哲学と世界経験の哲学——『論理学研究』から『イデー』まで』, 東北大学出版会.
- . 2015b. 「フッサールの観念論」, 『情況』第四期4(6), 情況出版, 158-171.
- . 2016. 「『論理学研究 補巻 第一部』を読む」, 『フッサール研究』13, 206-221.
- 富山豊. 2013. 「フッサール初期志向性理論はどの程度まで「実在論」か」, 『哲学雑誌』128(800), 158-175.
- . 2015. 「フッサール初期時間論における過去の構成と過去の実在性」, 『現象学年報』31, 171-8.
- 松井隆明. 2015. 「現象学的還元と構成の問題——フッサール超越論的観念論の基本的構図」, 『フッサール研究』12, 16-32.
- 丸山文隆. 2015. 「ハイデッガーの超越論的観念論——「ブリタニカ」草稿を手がかりに」, 『フッサール研究』12, 33-50.
- 八重樫徹. 2013. 「善さはいかにして構成されるのか——フッサール倫理学の研究」, 課程博士論文, 東京大学人文社会系研究科. [<http://hdl.handle.net/2261/57339> からダウンロード可 (最終閲覧 2016年2月1日)]